思い出の開拓義勇隊

長崎県　森田喜代

一　満州開拓女子指導員候補生として

私が満州開拓、開拓義勇隊と深い「きずな」を持つことになったのは、満蒙開拓少年義勇軍ができて三年目の昭和十五年十月、長崎県庁で満州開拓女子指導員候補生の五人の志願者の中から二人が選ばれて合格証をいただいたときからです。私が二十四歳のときでした。

長崎県や佐賀県の人たちは昔から海外へ雄飛する気性に富み、東南アジア、朝鮮などへは早くから進出しておりました。こういう土地柄ですから、日露戦争以後は満州方面にも盛んに進出していたのです。私が満州へ志したのも、義勇軍そのものの精神もさることながら、こういう民族的な血が私の心を動かしたのでしょうか……。

こうして各府県から選ばれた四十五人の女性たちは、この年の十二月に、東京、拓務省の聖和学苑に集まり、さらに試験の結果三十人が正式に指導員候補生として採用されました。ほかの二十九人の皆さんはそれぞれに立派な教養を身につけてきた人たちで、この人たちと一緒に選ばれたことは嬉しいことでしたが、さあこれからが大変……、長崎県人として恥じない開拓の指導者にならなければと、一面では誇らしくもあり、一面では当惑もしたものでした。

聖和学苑では二カ月間主に精神面での教育を受け、さらに内原訓練所に移って肉体面での教育を受けました。訓練生の皆さんと同じく鯉淵街道での朝食前の駆け足、内原独特の寒風が吹く中で、冷えきった頬をこすりながらの麦踏み、同僚の大半は初めての野良仕事に手も足も霜焼けになり、夕食後に薬を塗り合うなど、寒さを知らない当時の私には大変つらいことでした。その反面、声高らかに「開拓の歌」などを歌いながらの偕楽園や河和田分所、さらには水戸、大洗までの行軍は格別に楽しいものでした。皆、満州開拓の一翼を

担うという誇りを気負った若い女性だったのです。しかしこの間にも一人が退所して、私たち第五期生として卒業したものは二十九人となりました。

二　いよいよ現地の訓練所へ

昭和十六年四月、東京と内原での教育を終えた私たちは助教師、保母の資格をいただき三～五人ずつがひと組となって現地の幾つかの訓練所に配属になり、私は同室の三人と一緒に寧安訓練所勤務となりました。

寧安訓練所は牡丹江省寧安県にあり、ウラジオストックに近い図們（トモン）から満州に入り、図佳線を列車で九～十時間北上した東京城駅から北西二十キロメートルほどの位置にあります。訓練所の格付けは乙種訓練所で、内原訓練所で二～五カ月訓練を受けた義勇軍訓練生は渡満するとまず甲種訓練所に入って集団的・軍事的訓練を受け、第二～三年度には乙種訓練所に移って開拓者として必要な農事・土木訓練を受けます。したがって寧安訓練所では訓練所本部を中心にして半径五～六キロメートルの位置に約十カ所の中隊と畑地が広がっており、広さは東西約八キロメートル、南北約十～十二キロメートルくらいありました。私たち寮母は二～三人がひと組になって、一個中隊に一～二カ月ずつ回って訓練生の身の回りのことなどの世話をしました。

昭和十八年四月、黒河省嫩江（クンコウ）県の泥秋（ディイシュウ）訓練所に転任になりました。泥秋訓練所は乙種小訓練所（親（大）訓練所から遠く離れて一個中隊だけ独立して営農の訓練をする訓練所）で、私が就任したときには第五次の大阪郷土中隊が入っていました。

周囲には山あり、川あり、山では山菜が、川では魚や貝がたくさん採れ、冬にはスキーで体を鍛え、その上北満特有の瑪瑙（めのう）が地表に露出していました。最寄駅からは嫩江訓練所のある八洲駅よりもはるかに遠い場所にありましたが、四季を通じて自然に恵まれたすてきな所でした。

二年後、泥秋訓練所の中隊は第五次頭道義勇隊開拓団として東安省の入植地へ移り、私は昭和二十年四月から嫩江訓練所勤務となって平原中隊担当となりました。

春がきました　春くれば

かわいい芽をふく　泥柳

雪も氷も　いつしか消えて

北へ北へと　空の雲

歌にあるように冬は過ぎて待っていた春。五月の鍬入式も終わっていよいよ本格的な聖業に邁進しようとしていたとき、戦局の急迫に備えて中隊の三分の一以上の人が南満の奉天や延吉へ挺身隊として派遣され、私たちは留守部隊を守ることになったのです。さらに六月、七月の農繁期に入るころには戦局も大詰めを迎え、近藤所長先生をはじめ、訓練所本部や各中隊の幹部の先生方の大半が応召されて、それはそれは寂しい訓練所になってしまいました。

八月九日未明、ソ連が対日戦に参加し、それまでは爆音の一つも聞こえたことがなかった平穏な街、嫩江にもソ連の爆撃機が来襲し、私たちが夢にまで見ていた開拓の道ははかなくも断たれてしまったのです。

三　流浪の民

（一）嫩江収容所

私たちは、日本が戦争に負けたことも知らされずに一週間も放っておかれた八月二十三日に、あの憎らしいソ連兵がいきなり訓練所に侵入してきて、翌朝、リュックサック一つも持たされずに私たちは嫩江第一四三部隊に追い立てられるようにして、男女別々に収容され、これまで留守中隊を一緒に守ってきた訓練生の皆さんとは別々の行動をとることになりました。

九月十三日、雨の降る中を、軍人、一般邦人、拓友らの日本人の中から、十八歳から六十歳までの男子が引き抜かれてどこかへ連れていかれました。列の中にいた拓友の一人は「自分たちが斉斉哈爾（チチハル）に着くころには、一般の人は汽車で南下するというわさですよ」と言いました。しかし私はそれを頭から信用することはできず、「私たちは敗戦国の人間ですよ。この後どうなるのかもわからないのよ。体に気をつけて、落伍しないように、必ずお母さんのもとへ帰りつくのですよ」と寂しく見送りました。

征け拓士強くと祈る親心

哀れ別離の涙かくして

それからしばらく後のこと、訓練生の一人に会い、

「高場君が亡くなった。最後まで寮母先生の名前を呼んでいた」、ということを聞きました。最後まで私の名を……わずか四～五カ月一緒にいたにすぎない私をそれほどまでに頼っていたと知り、胸がジーンと熱くなりました。

粗末なるこの一輪の花なれど
友と手折りて君に捧げん

九月も終わるころには、寒くならないうちにと大きな墓穴が掘られました。「いずれ私もこの穴へ入れられるのではないか……」と心細くなったものでした。しかしこの穴も一カ月も経たぬうちにいっぱいになりました。いよいよ北満に冬がやってきたのです。十一月ともなると本格的な冬です。昨年まではペチカやオンドルでぬくぬくした毎日だったのに、今は哀れにも酷寒の中に置き去りにされ、枯れ葉枯れ柴を集め、粉炭や燃え残り炭を掘ってきては暖をとる有様。いずこにいるか、別れ別れになった拓友や邦人の婦人子供たちを思うと、心中いかばかりかと胸の痛む日々でした。

このころになると、お金を持っている人は甘いものを買うこともできましたが、着のみ着のまま避難してきた開拓団の人たちはそれすらも満足にできません。「お母さん、言うことを聞くからご飯を食べさせて……」そしてまた「おなかがすいた……何か食べたい」と、哀れにも細々としたあの声、どうすることもできずに一緒に泣く母親、いつまでも忘れられません。

飯上げの声聞こえくれば親も子も
心はずます時ぞ待たれる

疲労と飢餓の上に襲う寒気、子供はいうに及ばず大人さえも毎日のように寂しく亡くなっていかれました。ことに子供を残して逝く母親はどんなにか心残りであったでしょうか。戦争さえなかったならばと、つらい悲しい毎日でした。

（二）嫩江の人々に救われる

昭和二十一年一月、お正月といっても何もありません。ただ一日も早く内地へ帰りたいだけです。

まだ寒さも厳しい二月二十五日、八路軍側から、街へ出て働いてもよいという許しがでて、泥秋にいたころに、嫩江には物資が不足していると聞いて調味料や

山野の草花をもって行ってあげたことのある嫩江靴店へ、今度は私の方が救いを求めて行きました。すると「よくぞ元気で……よかったね」と夫婦共にこやかに迎え入れてくれ、さっそくご飯を炊いて食べるように勧めてくれました。しかし収容所の子供や病人が、この白いご飯をどんなにか待ち望んでいるかと思うと、とても一人で食べることはできず、理由を話して小さいおにぎりにしてもらって帰りました。このときほど人の心の温かさを感じ、宙に浮くほど嬉しく思ったことはありません。

それから数日後、青空市場で小姐（ショウジェ）（小女）が土豆子（馬鈴薯）を焼いていたので「給我、一個、土豆子吧（私に馬鈴薯を一個ください）」と手を合わせると「吃、両個、土豆個吧（馬鈴薯を二つ食べなさい）」と二つ差し出しました。「ハテ、なぜだろう」と、ちょっと迷いましたが遠慮なくいただきました。その翌日またその小姐に会うと、「家の太太（奥さん）が近いうちにお産なので、働いてくれる人を探しているから私の所にきなさい」とのこと。承諾してさっそく収容所に戻って身の回りを整理し、小姐に案内されてその家に行くと、家の主人から「日本人はこの部落に入れることはできない」と押し返されました。でもこの機会を逃したら、私が生き残れるチャンスはないと思い「読み書きも裁縫もできます。お金はいりません。食べるだけでよいから働かせてください」と二拝三拝して頼み、ようやく住み込ませてもらったのですが、その後は部落民も私の働き方を認めて親切にしてくれました。私は、これで生き延びることができると、ほっと胸をなで下ろしました。

ある夜のこと、後片付けも済み、黒い豚も小屋に入れて、星空を眺めながら好きだった賛美歌のアデロテ・デウォーテを歌っていると小姐が寄ってきて「ニーデ、フンジョウマ（あなたは信者ですか）?」と問うではありませんか。私は一瞬自分の耳を疑いましたが、すかさず「ニーデ、ショマミンズ（あなたの名前は）?」と問い返すと「ウォデ、ペトロ（私はペトロ）」という答え、私も「ウォデ、テルジア（私はテルジアよ）」と洗礼名を告げ、思わず手を握り合いました。

約三十年前にロシア革命から逃れて満州に入った白系ロシア人が、斉斉哈爾や遠くは哈爾浜（ハルビン）の先まで広がって生き延び、ロシア正教を根付かせ広めていきましたが、嫩江にもロシア正教が広まっていたのです。このことがあった後は、部落民も一層親密になってくれました。宗教は憎しみや国境を越えて、偉大な力をもっていることの喜びを、このときほど痛感したことはありません。

嫩江には奥地からたくさんの開拓団の人たちが避難してきていましたが、その中に圏泡義勇隊開拓団（泥秋訓練所の少し南にあり、混成第一次）の人たちもおり、団員の奥さんで長崎県国見町出身の人と出会ったことも私の幸せでした。彼女は私を義妹だとほかの人に紹介し、時折訪ねると家族みんなで親切にしてくれました。その方から三月の半ばごろ「二十一日に南下するそうだから、帰ってきて皆と一緒になりなさい」との連絡がありました。満人の家に入っていて日本人の動きがよくわからなかった私には、この連絡は天の助けでした。

さっそく自分が使った布団を干し、きちんとたたんで「多々謝々、恩不忘回去故国」と書いてこの家の主人に渡すと、二人でなにか話していましたが、「辛苦辛苦」と笑顔で言いながら十円紙幣十枚（現在の日本の価値で三十万円ぐらいか……）をだしてくれました。私はこの人たちに命を救っていただいたようなものだから、お金をもらうことはできないと思って断ったのですが、主人はどうしても承知せず、無理やりに私の手にお金を握らせた上に衣類までも持たせてくれました。

この家の主人は、嫩江街協和区一班五組の張文屏さんといい、昭和六十一年八月に訪中したときに、嫩江靴店のご夫婦とともに、当時お世話していただいたことに対して深く感謝の意を伝えたかったのですが、県公署の方々の努力にもかかわらず、全く手掛かりはつかめませんでした。今思い返せばありがとうございますがえってくる当時の情景と面影、この人たちの消息を求めて懸命に探してくださった県公署の方々、お世話になった方々の上に神のお恵みの多からんことを祈るのみで

す。

（三）斉斉哈爾へ

当時、嫩江街の日本人会会長は、嫩江訓練所訓練部長であった中沢広先生でした（中沢先生は北海道出身、平成元年七月十八日に八十八歳でご逝去されました）。中沢先生は嫩江街に避難している日本人を南下させるについて、四月に入ると地表の氷が溶けて足元が悪くなり、川、池、沼などは渡れなくなるおそれがあるから、解氷期にならないうちに南下させようと主だった人たちと話し合われ、三月二十一日に第一隊二百七十五人が斉斉哈爾に向けて出発しました。

住み慣れし嫩江の街よいざさらば
春を尋ねて我はいずこへ

ただ黙々と南へ南へ、疲れた足を運ぶ二百人近い日本人の列。大志を抱いて勇躍足を踏み入れたであろうこの北満の地から、初志を果たして身にも心にも錦を飾って帰るのではなく、為政者のなせる業の結果とはいえ、悲しくも幾多の同胞を失い、裸同然、弱り切ってこの地を後にしなければならない無念さ。老人たちは何回も何回も後を振り返り「あのとき、なんとかしてあのお金だけでも持って出られなかったものか」とつぶやきながらの青ざめた顔。

千万の富栄を捨てて立ち出ずる
あわれなるかな同胞の身は

奥地から避難してきたほとんどの日本人は、何も持たせてもらえず、とはいっても持つべきものはすでに食べ物に変わってしまったのが実情で、わずか嫩江街に住んでいた人のみが隠すようにして、お金を持ち出したようでした。私は張さんからいただいたお金の半分を後の隊になった長崎県出身の人にあげ「私は先に行くけど、斉斉哈爾の教会には知人がいるので、私が斉斉哈爾に着いたことを話しておくから、あなたも斉斉哈爾に着いたら必ず教会を訪ねて私のことを聞いてください」と言い残し、マリア様だけはしっかりと身につけて出発しました。

嫩江の収容所を出た私たちは、八洲の駅を通り、伊拉哈・納河を過ぎ、明日は寧年あたりまで行けるかと思った夜、馬賊に襲われました。私たち婦女子はただ

おろおろして逃げ惑うばかりでしたが、日本人会の男の方たちは被害を出さないためにご苦労されました。このとき「女子供たちだけには、危害を加えてくれるな！」と叫ばれた会長の声も、今なお耳に残っています。必死に叫ばれたあの声、言葉、決して忘れることはできません。

嫩江と斉斉哈爾との間は、平常ならば汽車で十時間ほどの距離でしたが、自分の足に頼るほかに方法のない私たちは、凍河を渡り山を越えて十一日間もかかって着くことができました。その間にも体力の弱い老人、ほとんどの乳飲み子がはかなく満州の土に還ったのでした。

昭和二十一年四月五日、いくつかの難関をくぐり抜けて無事に斉斉哈爾に着くことができた私は、身辺も一応落ち着いたので、訓練所在職中に哈爾浜へ出張するときなどに、クリスチャンの証明書などを預けるのに立ち寄って親しくなっていた教会へ行きました。私の姿を見た神父様は「この混乱の中をよくぞ元気で」と手をとらんばかりに中に招き入れ、温かいお茶や甘い物などをすすめてくださり「よくぞ生き延びてこられた。生きているものやら、もしかして匪賊やソ連兵に襲われているのではないかと心配していたが、元気な顔を見ることができて、本当によかった、よかった」と何回も言われました。いつも変わらぬベルギー人の神父様には、私がこの方と知己であったことに今更ながら神のお導きと、感謝せずにはいられませんでした。その後は神父様自ら収容所へお菓子、せっけん、着物などを持ってきてくださり、「早く街へ働きに出て生活を立て、次の移動に備えなさい」と助言をしてくださいました。

ある日曜日、教会の傍らに佇んでいる私に、「日本人よ、泣いていないで私の家にきなさい」と親娘三人の満人が声をかけてくれました。この一家は「左」という姓で、娘は代弟（六歳）といいます。私はこの家の世話になり、九月に引揚列車に乗るまでの五カ月間近所の人の縫い物などをして平和な日々を過ごしました。代弟は私によくなつき、時折収容所へいって遅くなったときには家の入り口で待っていて、私の姿を見

ると「媽々、姨回来了（お母さん、おばさんが帰ってきたよ）」と大きな声で家の中へ告げるのです。

外へ出て帰れば六歳の代弟は
姨回来了と走り告げ行く

また、ときには二人で手をつないで、私が教えた『靴が鳴る』を歌いながら家に入るのです。朝夕のお祈りには、満語の祈りの言葉はよく分からないながらも一緒にできたし、日曜日の礼拝も三人で仲良く行きました。なんの不安もなくミサにあずかれる喜びもあってか、賛美歌を歌うと満人は老若の別なく「私の隣へきなさい」と誘ってくれました。斉斉哈爾は、以前は日本人学校もあったほど教育も行き届いた街で、おそらくは学校で文字を覚えたのであろう隣家の女の子は、地面に棒切れで字を書いて、満語を教えてくれるのです。この子の家庭は父親と二人だけの細々とした生活をしていましたが、明るい素直な子でした。

満語をば文字にて教える女子は
我にも似たり母なき一人子

また、嫩江で知りあった圏泡義勇隊開拓団の方は、嫩江から南下するときも一緒で、その後も義妹として付き合ってくれました。今でも姉妹以上の気持ちでお付き合いしています。

（四）帰国列車

昭和二十一年七月に入ると話の伝わりかたが早い満人の間に、南の方では春ごろから日本人の帰国が進んでいるというわさが流れてきました。私も左さんや教会で会う満人の信者から、この話を聞くことができましたが、初めのうちはまだ確実な情報になるほどではなかったので、ほかの日本人には話しませんでした。それが七月末にはっきりとした情報となってきて、日本人の間にもその話が流れるようになり、八月になると日本人会でも八路軍の指示で乗車計画が話し合われたそうです。

八月下旬、私たちの収容所区域に乗車計画が伝えられ、その話は圏泡義勇隊開拓団の方からも、また教会の神父様からも祝福の言葉とともに教えられました。私は乗車の日の前日に、左さん親娘、教会の皆さんに厚くお礼を言って収容所に戻りました。

九月二日、私たちが避難民帰国者第二班として斉斉哈爾をたつ日、斉斉哈爾の駅長さんから「私が若いときに日本で学び卒業して故郷に帰る日に、学友たちが『蛍の光』を歌って送ってくれました。それはたいへん嬉しい思い出です。今日は私が『蛍の光』の歌で、皆さんをお送りします。私たちは日本人の皆さんが遺してくれた数々の功績や技術や教育を、きっと大切に守って行きます。そして何年かして両国民が自由に行き来できるようになったときには、必ずこの斉斉哈爾に帰ってきてください。私たちは両手を挙げて皆さんをお迎えするでしょう」と、嬉しいお別れの言葉とお見送りをいただきました。また、左さんの太々は私にビンを持たせ、「汽車が止まると必ずお茶を売りにくるから、首にかけているマリア様のメダイ（メダル）を見せなさい。茶売り人は『不要銭』と言って、お金をとらずにお茶をくれるでしょう」と言いました。私たち避難民を乗せた無蓋貨車の帰国列車は、こうして斉斉哈爾の駅を離れました。

列車は一時間ぐらいごとに小さな駅に止まりました。するとどこからともなくお茶や果物・饅頭などを売りにきました。私は左太々に言われたとおり首にかけたマリア様を見せると、その人たちは「不要銭、好好回去吧（お金はいらないよ、気をつけてお帰り）」と言ってお茶や果物を私の手に持たせ、私の帰国を祝福してくれました。ここでも私は見知らぬ善き隣人の好意を受けることができました。私はこれもイエス様マリア様のお導きであると感謝し、「多謝多謝（本当にありがとう）」の言葉を述べてその好意をありがたくいただきました。

列車は普通ならば十二〜三時間で着く哈爾浜の手前まで、丸二日余りかかって着くと畑の中の何もない場所で停車し、私たちは貨車から降ろされました。しばらく歩くと松花江のほとりに出ましたが、驚いたことに松花江には水がほとんどありません。渇水で流れる水がなく、中央部分に細い流れが見えるだけです。私たちは干上がった松花江を徒歩で渡りました。在りし日の松花江を希望に燃えて渡ったことが昔日のようです。何万人の日本人がこの河を渡って赴いたであろう

北満の地、それが今は敗残の民として黙々と渡るのです。再びこの河を渡って帰ることのできなかった幾多の御霊をしのぶとき、かなしかったさまざまなことが思い出されました。苦難の逃避行の中で発疹チフスや飢餓や寒気で逝かれた子供たち、中でも子供を残して逝かれる人の心は悲痛です。子供たちのほとんどは母親の故郷を知りません。「お母さん死んじゃいやだ。ぼくたちは内地の爺ちゃんや婆ちゃんのおうちは知らないんだよー」と泣き叫ぶ子供、細々とした手を伸ばして消え入るような声で子供の名を呼び「この子を残しては死ねない、死にたくない」と言いつつはかなく逝かれた若い母親、ただただご冥福を祈るのみです。若い人に助けられながら懸命に歩いていた老人の姿が、次の日には見えないことが何回もありました。でも私は今、はるか日本の地を望めるところまでたどり着いて船に乗れる日を待っています。自分が単身で若いということもあるけれど、私を守り助けてくださった多くの方々のおかげで、私は今ここに立っています。生命を守り通せた喜びといっしょに、この命をお守りくださったマリア様に感謝せずにはいられませんでした。

（五）引揚船の中で原爆の被害を聞く

昭和二十一年十月一日、待ちに待った引揚船興安丸が岸壁に横付けになり、私たちはこれまでの疲れも忘れてタラップを踏みました。船が岸壁を離れ皆も船室に落ち着いたころ、「広島市と長崎市の皆さんは、中デッキの広場にお集まりください」という知らせがあり、ぞろぞろと中デッキに集まってみると、正面に大きな地図が二枚貼られ、その大部分が赤く塗られています。そして壇上に立った人が言いました。「昨年八月六日、広島市に特殊な爆弾が落とされたことを知っている人は多いと思いますが、三日後の九日に、長崎市にもこの爆弾が落とされました。この爆弾はたった一発で町を跡形もないほどに破壊し、数万人の死傷者をだしました。広島市と長崎市に帰られる方々は、ご家族はおそらく亡くなっているものと思って帰ってください。万が一にも生きているかもしれないというはかない希望を持って帰っても、皆亡くなっていた場合には、どんなにかつらいでしょうから……そして皆さ

ん、決して早まったことを考えないように、これからの故郷を、日本を作り直すために頑張ってください」と。

私は斉斉哈爾で、教会の神父様から長崎も大きな被害を受けたことを聞いてはいましたが、地図の前で被害の状況を説明されると、疎開しているはずの母の身が案じられました。昭和二十年四月に、「小学三年生と一年生の孫二人と一緒に、市から三里ほど山奥の教会の近くに疎開した」との便りがあったので一応安心はしていたものの、万一にも何かの用事で自宅に帰っていて、この日の空襲に遭っていなかっただろうかと、心は千々に乱れた一瞬でした。

大連から博多までは普通三十時間余り、壱岐島からでも大差はないはずの航海も船足が遅く、あちらこちらで止まったりして一週間ほどかかって博多に入港。ここでまた消毒や注射、引揚証明書や被服の支給などでさらに一週間ほどたちました。病人は、船内で亡くなられた方が一人いましたが、ほかの人は旧陸、海軍の病院などへ移されました。

四　故郷の街へ帰る

昭和二十一年十月十三日、博多でのいろいろな手続きも済んで、やっと故郷へ帰れる日がきました。自分の無事を知らせようと駅前の郵便局で、長崎市外の叔父と市内の自宅へ電報を頼むと、「長崎は駄目です」といって受け付けてくれず、それでも疎開していたから……と言って頼んできましたが、局員が言うように届いてはいませんでした。

汽車の中は復員兵と引揚者で混雑し、身動きもできないほどでした。引揚援護局の人から、「引揚証明書はいろいろな特配や国からの援助を受けるときにも重要な証拠となるもので、街ではこの証明書が闇で売買されており、またスリも、故郷に帰れるのだとウキウキしていたり、汽車の混雑の中でウロウロしている人のふところやポケットを狙っているから、特に汽車の中ではスリに盗まれないように注意するように」と言われ、宝物のように懐中深くしまって帰りました。引揚証明書は今でも大切にして、将来、孫にも語ってやろうと年に一回は虫干しをしています。

十月十四日、汽車が鳥栖から長崎線に入って約一時間、山裾を回り長崎駅に向かって直線になり、長崎湾が正面に見えてくるとあと数分、私はいても立ってもいられない気持ちになりました。汽車が町並みに入ると、私は左側の窓の外を過ぎてゆく風景の中のある物を一生懸命に探しました。ところがそれがないのです。街の中に一際高く突き出ているはずの、浦上天主堂の尖塔が見えないのです。

「ああ、あの天主堂も原爆にやられたのだ」と、がっかりして腰を落とすと、汽車はスピードを落として長崎駅のホームへ入りました。ホームから浦上川の向こう側に見える、長崎造船所のかつては軍艦や一万トンクラスの船を造っていた大きなクレーンもありません。ここも原爆の爆風をまともに受けたのでしょう。

駅を出てみると、駅前の大通りはポツンポツンと商店が建っているだけで、以前は繁華街がひしめいていた新地も、眼鏡橋をはじめ古風な石橋がいくつも重なるように架かっている鳴神川も、はるか向こうのほうまで見通せるほど、浦上天主堂は平屋のそれらしい建物がはるかに認められるほどでした。

故郷の街のあまりの変わりように、ただボーッと駅前で立ちつくしていると、私の前を二、三回行き来する人がいました。私もハッと気付いてみると、その人は私の家の近所の人です。その人も私の姿にびっくりしたようですが、すぐに分かったとみえて、「まあ、よく元気で帰ってきなさったよねー、おっかさんも元気でおらすけん、早う帰ってあげなさんねー」と言われました。私の一番心配していたことがこの一言ですっかり消えて、それまで重かった足も軽々と市役所へ向かい、帰国の手続きをすませると、宙を飛ぶような気持ちで皆が待っている我が家へ、元気いっぱいで帰りました。

昭和十五年十二月に、東京の拓務省聖和学苑にはいってから、内原、寧安、泥秋、嫩江、斉斉哈爾を経て、二十一年十月十四日まで五年十カ月振りの帰国となりましたが、あの時満州へ渡らずにこのまま長崎にいたならば、今の私はあっただろうか、義勇隊に入っていたからこそ、私は生命を全うすることができたのだと

思います。

家族も今なお原爆にもめげずに、今日の命ある喜びを神々の御恵みと感謝しております。私もまた多くの方々に出会い支えられながら、温かく交わっていただけたのは、ほかならぬ神様の愛と人との愛の賜だったのではないでしょうか。

ふる里満州から祖国日本へ

大分県　杉目　昇

私のふる里満州

大正五年七月、私は旧満州奉天市の日本領事館官舎で生まれ、大連で育った。大連第一中学校を経て、哈爾浜(ハルビン)学院に進み、蒙古民族興隆に希望を持って、ホロンバイル蒙古で満州国地方行政官として勤務した。この地方は、蒙系を主体に、満系・露系・鮮系など多民族の居住地域であった。

満州国が昭和七年建国され、我々日本人も満州国人になり、日系と呼んだ。日鮮満蒙露など五族協和の国である。

日本の敗戦後、しきりに満州侵略との批判がなされているが、我々は「五族協和」「王道楽土」の旗高く掲げて、ひたすら満州国民三千万の幸せを願って、命懸けの日々をおくり、青春の情熱をこの地で燃やしたのである。満州こそ我がふる里であり、墳墓の地であると考えていた。

大東亜戦争の戦局が敗戦の色濃くなった昭和十九年二月、興安嶺西側浜州線沿線の街、牙克石(ヤーケーシー)で応召、海拉爾(ハイラル)の部隊に入り、その年九月幹部候補生としての教育のため、熊本に派遣された。生を受けて二十八年を経て、初めて日本内地の空気と水をじっくり味わうこととなった。稲や竹とも初めての出会いであった。阿蘇の煙を望見しつつ、これが日本であることをしみじみと感じたのであった。

終戦、ふる里満州を目指して

昭和二十年八月に入って早々、軍情報は「ソ連はシベリア鉄道全幅の輸送力を挙げて満州国境へ兵員移動